

特集・情報化社会と市民①

# 対談 社会、技術の変化と情報化社会

安田寿明 寄藤昂

はじめに  
——情報化を考える  
二——情報化社会の課題

はじめに

寄藤 きょうは安田先生にいろいろとお話を伺いながら、情報化と情報化社会の姿、そして、その課題について、比較的ソフトな側面を中心に考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

安田 情報化社会というものを考える前に、私はまず冒頭で、横浜の背負っている不幸な歴史というのを話しておきたいと思っています。

田中康夫さんは私が非常に好きな評論家ですが、けれども、ただ一点気に入らないのは、あの人はどんな評論でも横浜をいっつもけなしていることです。

印象に残っているのは、ついこの間終わった

『朝日ジャーナル』の「ファディッシュ考現学」で、MM21に建てるホテルなんて、はやるはずがないという。横浜に本拠を置く企業は少ないから今度建つホテルの中でまずパーティーははやらない、だからホテルはだめだろうというわけです。そして田中さんは、すぐ神戸と比較する。神戸のしゃれたトレンドイヤーなシティー感覚、そういうものが横浜には全くない、ど田舎だという議論をいっつもされている。

これに対して、それではなぜ情報化社会の根底になる産業経済が、横浜では神戸、大阪、東京と比べればおくれをとったか。その歴史的な背景を、私は話しておきたいのです。

戦後の横浜の歴史で忘れてならないことは、

ごく最近までの世界の国際情勢の中での日本の安全保障体制に横浜が支配されてきたことです。その中で横浜は大きな犠牲を払ってきた。それは沖繩だとか、あるいは岩国だとか、佐世保だとか、いろいろありますけれど、横浜の負ってきた不幸な歴史を皆さん忘れてしまっているという、私は非常に憤慨にたえない思いがあります。

私が横浜市民になったのは昭和三十四年なのですが、初めて横浜に来てみてびっくりしたことは、伊勢佐木町の裏側に飛行場があって、米軍の連絡機がブンブン飛びかっていたことです。また、かつて関内という日本経済の中心地で栄

寄藤昂氏



取られてしまっていた。横浜は港町といっても本当に名ばかりで、貿易扱いは高も

えた地域一帯、そこもすべて米軍のモータープールで、兵員輸送車、装甲車が何百台、何千台と雨ざらしで置いてある。もう荒涼たる鉄の砂漠地帯という、そういう印象を持っているわけです。

唯一のコンクリート舗装道路は、その当時行政協定道路とっていたのですが、今の国道1号線です。東神奈川からスタートして横浜新道に至る道が、その当時の日本では一番いい道路だったので。それも瑞穂埠頭から陸揚げされた戦車が相模原の補給廠まで輸送できるようにと、そういう目的のためにつくられた安保条約地位協定による道路だったので。この瑞穂埠頭もその当時一番いい埠頭だったので、米軍専用埠頭であり、いつの間にか横浜の国外貿易高、取扱高は神戸港に抜かれてしまっていた。新たにできた京浜港、東京港、そちらの方にも

安田寿明氏



内閣の音 内閣の音 内閣の音 内閣の音

頭取りで始まった高度経済成長の先頭を切って走っていたのに対して、横浜は日米安保条約の中で大きな役割を果たしていたために、高度経済成長にも乗れなかった。

米軍の接收が徐々に解除され始めて、ようやく横浜市らしい動きができるようになったのは、高度経済成長も終わり、オイルショックが近づいている時期です。そういう時期になって、ようやく横浜市としての自主性がとれ出した。そういう、どちらかといえば、日本の経済社会の発展の陰で横浜市が払った大きな犠牲というのが年とともに風化してしまって、人々に忘れ去られてきていると思います。

横浜は、今の社会のトレンドディーな姿から見れば何となく泥臭さを引きずっている。それが横浜市のイメージであったとしても、田中康夫さんに攻撃されるいわれはまったく無いと思う。

ほとんど減ってしまったのです。当時、ほかの諸都市がすべて池田内閣の音

私は生まれながらの横浜市民ではないけれども、最初に横浜市に来たときの印象が余りにも鮮烈だったので。そういうことから考えれば、今の横浜の現状を見てみますと、本当によくやっただと思います。

例をあげると、ごく局地的な地域開発というのは、横浜市が各都市の先鞭をつけたといえるのではないかと思うのです。典型例が横浜駅の西口。あれも私が最初に来たときには相模鉄道の砂利置き場だったので。その開発に非常に大きく寄与したのが、地元の横浜市大の商学部山口辰男先生だったと思います。そういった人たちの知恵を結集して、西口というごく限られた地域ではありますが、戦後の高度経済成長の中のいわゆる都市化の、一種のモデル地域になったという歴史も持っているわけです。

そういった伝統が、今私たちが直面している情報化社会の中でどういう問題点を持っているのか、そして、今後、それをどう発展させていくかにも生かされなければならない。いつまでも過去の悲しみというものを振り返ってみても仕方がない。未来はどうあるべきか。別の見方から見れば、田中さんのいう泥臭い田舎者というの、逆手にとれば生かしようがあるのかもしれないというようなことですね。そういうことで、これから、一市民として横浜市の将来を

考えてみたいと思っっているのです。

**寄藤** 今いわれたように、マクロにはとっても受け身というか、いつも何かされている存在。今お話のあったこと以外にも、高度成長期に入ってから、今度は住宅ラッシュですよ。東京のを全部しょい込んでしまった。だから、一年間に四十何校学校をつくらなければいけなかったというような。それと、今まきにお話のあった局地的な先進性みたいな部分です。伊勢佐木モールは全国のモールの先例になった。何かそういうことをずっと繰り返し返させられたとか、繰り返し返して来たとか、そういう印象を強く持つのです。

## 一——情報化を考える

### 情報化という言葉

**寄藤** 「みなとみらい21」という開発計画は、これからの横浜市にとって大変重要なものなのですが、その議論でも「情報化」というのが必ずついてきます。ただ、私の専門から見ると、これまで盛んに言われてきた情報化というのは少し危ない部分があるという印象があります。MM21の計画の初期のころ、情報装備みたいなこと、光ファイバーとか、コンピュータセンターとか、そういったことにすぐ話が行ってし

まい、そこにどういう人たちが集まって、どういふ情報的な活動をするのかという議論がいつも後回しになっていった。当時の日本はどこでもそうだったという言い方もできるのですが、先生からごらんになって、その辺、どうですか。**安田** 今おっしゃったことは非常に大事なことで、私は光ファイバーだとか、それを利用したケーブルテレビ、あるいはキャブテンだとか、そういったビデオテックサービスですね、そういうニューメディアを論じるときに、いつも例えに引用していることがあるのです。それは何かというと、東海道新幹線が開通してからの二十五年間、新横浜駅前の惨状を見よと(笑)。最近新横浜の駅前も変わってきましたけれど、開通して以来四半世紀に至るまでの新横浜駅前の姿は、ニューメディアの実物教本としては一番すぐれたものだったのです。

ニューメディア装置系の光ファイバーだとか、INSだとか、そういったものは東海道新幹線に例えることができるのです。その東海道新幹線の駅に相当するのが、いろいろなところでいわれているテレピアだとか、ユートピアだとかいうようなものに相当するわけです。地元の経済力だとか民力だとか、開発計画を抜きにしてそういうものをつくったとすると、それはどういう形になるかというのを新横浜駅かいわい

で示してきたといえるのです。

情報化社会の中の一歩の弱点を、目に見える見本で持っているということは、横浜市にとっては非常に悲しいことでもあるのですけれども(笑)。「情報化」という言葉が意味するのは、人々の生活感覚だとか生活意識だとかいうものを無視したときには成り立たないという、そういう典型例であるわけです。

また「情報化」という言葉からは、どうしても高度情報化、これがすぐ頭に出てくるのですが、情報にもいろいろあるわけです。変な分け方かもしれないですが、メインインフォメーションとサブインフォメーション、あるいはカウンターカルチャーインフォメーションといってもいいでしょう。王道を歩いている教養の高い人から見ればまゆをひそめるような情報、これも情報なのです。そういうものを排除した情報システムというのは、成り立たないのではないかと私は思います。

新横浜駅でわかるように、都市計画的に物々考えるか、あるいは自然発生的に都市が形づくられていくか。街のたたずまいというものと情報化のたたずまいというのは非常に大きな共通点があるのです。そのところがつつい見過ごされてきている。横浜市が抱えている情報化の問題というのも、私は根本原因はそういうと

ころにあるのではないかという感じを持っています。

寄藤 情報化という言葉をめぐるいろいろな混乱があるのですけれども、少し整理して考えてみると、いわゆる情報産業というか、生産活動として情報化した産業が集まることを期待する冷めた部分と、そうではなくて、いわば街に回線網が張りめぐらされていけば、都市や市民生活それ自体が今より格好いいものになっていくというような、イメージ的な部分とが混在しているように思うのです。さらに、それを可能にする技術的・施設の裏づけのことを情報化と言うこともあるわけです。

ただ、その中で確かに最近二十年ぐらいの間に着実に変わってきている部分と、泡のように消えてしまった部分とがあります。それはどうしてそういう違いが出てくるのか、あるいは、そういう極端な違いが出てくることをもう少し予見できないものかという疑問をいつも持っているのです。

一番代表的な例としては、私はキャプテンとファクスだろうと思うのです。ある時期、個人用のファクスなどはだれも話題にしないで、キャプテンこそは情報化のスターである、という扱いでした。ところが、今や誰の目にも結果は明らかだと思えます。

安田 そういった議論を整理するために、生活に関係する情報の方はさておいて、生産と流通、つまり産業経済における情報化というところを先に押さえておきたいと思えます。

産業経済における情報化には二つの側面がありまして、一つは生産活動や流通活動、すなわち経済学でいう再生産活動そのものの情報化です。それは具体的にはどういうことかと、例えば自動車の組立作業など従来自動化は絶対不可能だといわれていたものが、いわゆる情報化、ハイテク化によって、今では自動化率が九五%を超えてしまった。これは生産技術の情報化の最たるものだと思うのです。それがなぜ必要だったのかといえば、高い原価の土地を有効活用して高付加価値を上げていくためには、そういう高度情報化というものが必要だったからです。

もう一つは、生産技術そのものが高度に情報化してきたために、今度は管理の技術が非常に複雑かつ入り組んだものになってきた。その情報化というものが問われはじめたわけです。

昔、生産活動に人手がとられていた時代には、管理経費というのが常々問題になっていました。生産に関係のないような管理経費は出来るだけ圧縮すべきだという考え方が主流だったわけです。ところが、生産活動で非常に高い付加価値

が得られるようになると、それを支援し、基盤を固めるための情報技術というのが重視されるようになり、その典型例がオフィスオートメーションです。

オフィスオートメーションというイメージからいいますと、事務所もまた生産現場と同じように自動化かつ省力化されて、人間はいなくなるだろうと思われていたのですが、知的な情報活動に重点が置かれてくると、省力化どころではない。むしろ、情報技術を使って個人の持っている知識技術の拡大再生産ということが際限なく起こってしまって、普通の一般企業でも管理事務職の比率が非常に増える。産業構造全体でも、先進工業諸国では第三次産業の従事者というものが総労働人口の過半数を超えて、十年たつたかない間に七五%にまでなるとい時代になったのです。

だから、産業経済における情報化というのは、先進工業諸国のいわば避けられない運命であるし、また、それをどう推進していくかが、経済体系の秩序を保っていく上で非常に重要な課題になってきているといえます。そのアナロジーをそのまま生活重視の社会に適用していいものかどうかというところに、寄藤さんが最初に問題提起された一番のポイントがあると私は思います。

情報化社会の表と裏

**安田** 最近私が翻訳したサイエンスアメリカンの論文の中に、フランスの代表的ニューメディアのテレテルに関するものがありました。ビデオテックスの中で唯一成功しているのはテレテルだが、なぜ成功したのかということですね。

これにはいろいろな理由があるのですが、その最大の理由は、プライベート・エレクトロニック・メール、つまり、個人間の電子情報の交換が最初想定していたよりもすぐ必要があった。それではなぜ個人間の文書通信がそんなに盛んなのかというと、その大半は高級コルガールのチラシ広告やホテルのダイレクトメール、それで占められているからだということです。そんなばかな話はないと否定する声もあるけれど、程度の高い学術論文にまで話題が出てくることからいえば、実態は推察されるわけです。ニューメディアが本当に盛んになるためには、やはりそういうものが必要なのです。

私は考え方が古いせいとか、例えばテレビの深夜放送などは見ていて目をそむけたくなることがあります。一番ひどいと思うのは、タクシーに乗っているときに聞く中波のラジオ放送です。中波放送というのは、日本国内だけではなく、近隣諸国にも届くわけです。こういう番組内容

が近隣諸国に届いて、しかも、天安門事件とか、あるいは北朝鮮、韓国、それぞれに国内問題を抱えて、みんな国のことを一生懸命考えているところに届いている。日本人として恥ずかしいと、タクシーに乗っているほんのわずかな時間でも考え込んでしまうのです。だけど、こういう考え方を国内で発言すると、絶対に賛成されないでしょうね。

ところが、この種の低俗情報を歓迎する普通の人たちの常識的な感覚がニューメディアの中になかなか入り込みにくいところが、いろいろな情報化技術が失敗している一番の根本原因なのではないかと思ったりもします。

**寄藤** そのことに関連して、普通の市民が実際に情報化で享受している部分と、マスコミなどで「情報化」といって話題にされる部分とがずれてしまっているのではないか。だから、話題としての情報化というときには何か現在とかけ離れたすごいことをイメージして、否定してみたり、あこがれてみたりする。ところが、実際に見えない間に進行している情報化は、例えば銀行のキャッシュカードみたいなこととか、意外にそれと認識されていないようなのです。なぜそんなふうになぜしてしまうのでしょうか。

**安田** 全般的に科学技術に対する日本人のものの考え方、これは情報技術だけではなく、科

学の中にも変な話がいっぱいあります。例えば超電導だとか、あるいは常温核融合ですね。これは試験管の中の話であるのに、わざわざ成功の兆しが見えた途端に、一夜にして世の中が変わるといような大騒ぎのされ方をするのです。そういうのも含めて、機械的な情報技術に頼ろうというような考え方を全部ひっくり返して、私はB29ショックといっているのです(笑)。

初めてB29を見上げたときの感動というか、恐怖感というのは、飛行機があんなに高いところを飛べるといことを思いもしなかったということが一つです。しかも、そういう高い空を飛んでいる飛行機は実に美しい。まさに白魚のように青空の中に銀翼をきらめかせて、飛行機雲を引っ張っている。そういうのが飛んでいる。アメリカという国はすごい国で、えらいところと戦争をやっているということで随分ショックを受けた。もつとも、最初の偵察から二、三週間とたたないうちに、そのきれいな飛行機が悪魔の使者になってしまったわけですが。

日本人はみんな、技術で何もかも一夜にして天変地異が起こるといようなショックを、あのとときに受けてしまったのではないか。機械力、技術力があれば、何でも世の中を変えられることができるという、そういう安易な考え方に私たちは支配されるようになってきた。これは一つの反省

点だといつも私は思っているのです。

寄藤 その一方で、身近に見えないうちに進んでいる情報化みたいな部分が意外にわかってない。あるいは、それを具体的にどうやってわかってもらうというか、浸透させたいのかというあたりも難しい部分なのです。

例えば、このごろ高校でクレジットカードのことを教えるかどうかという話がよく出てきます。いわば情報化の怖さみたいなものは、今の教育課程ではどこでも教えてない。同じように、例えばコンピュータとか、情報化をしてない社会とした社会とではどこが違うのか、という部分の親から子への伝え方とか、学校での伝え方とか、文化全体の対応というのが迫いついてない気がするのです。

安田 それについて、私はいつもいっているのですが、情報化が進んでくると、あるいは技術の高度化が進んでくると、それと反比例して人間が根源的に持っている一番原始的なパワー、そういうものが非常に大事になってくるのです。だから、クレジットカードを高等学校で教えるかどうかという問題以前に、文明国で行われている一般的な法体系の根本的な精神を子供たちに教えないといけない。

文明国では子供の間にはいろいろな保護を受けられ、法的な責任を問われることはない。それ

が成人になれば、法の支配のもとに置かれて、それに応じて法を守るといふ義務が人間には生じてくるわけです。つまり未成年の間はいろいろな形で義務を免除されているかわりに、人間としての責任を果たさなくてもいいという、そういう面もあるわけです。

文明社会のそういう弁別基準というのをきちんと教えなければならぬ。そういう意味での教育の不足というのがいろいろな問題を生じていくわけで、いわゆる権利義務の概念と、その区別というものがはっきりしていれば、少なくとも高校生でクレジットカードを持って使っているものかどうかという判断は、ちゃんと自分でできるようになるだろう。何もクレジットカードの功罪を教える必要はないので、その根本にあるものを教えるべきだと思います。

私は年に一回、国税庁の人たちを教える機会を持っています。今、企業の中でコンピュータ化が進んでいます。その機械化会計に対応して、どう税務調査を進めていくのかという教育の一环です。そのとき、いつも口を酸っぱくしているのですが、技術に対して自分たちも技術で武装して対抗しようとしてはだめなのです。相手が高度な技術で武装してくるのであれば、それに対抗する最強のものは何かというと、汗を流す、その一言に尽きるところです。細かな伝

票の突き合わせだとか、あるいは、人間の直観力、ひらめきといいますか、そういうものを大事にする、研ぎ澄ます。それが高度技術情報化社会の中で不正を見抜く一番の根源力となるのです。

これは何もそういったことだけに限らずに、基本的には文明諸国、先進工業国でいわれている英国病だとか、あるいは、最近のアメリカの産業空洞化のような、いわゆる経済の老化といえますか、そういう現象の一番の根本原因です。情報化を推進することによって国としての体力の減少を防げるのではなく、むしろ情報化によって、最もラジカルな、かつ、原始的な人間のパワーを軽視する時代になってきているのではないかと思います。

寄藤 今のお話を聞いていまして、チェスタトンという作家の推理小説を思い出しました。ものすごく複雑なアリバイを組み立てた犯人が結局最後には捕まり、どうして自分だとわかったのかと聞くのですが、探偵役の神父さんは「最初から怪しいと思っていた」という落ちがついているのです。今のお話でも多分そういうことではないかという気がします。普通の人間が普通に考えたらわかることを、どうしてコンピュータをひねくらなくてはいけないのか。もちろん、そうしなければいけない部分もたくさんあるの

ですが。

安田 一般的に、「情報化」というような言葉で区切らなくても、人々全体が、今は完全に情報化の中にどっぷり浸っているということ、これは確実にいえることなのです。

例えばベイブリッジができてから何度となく評論で取り上げられていることですけれども、ベイブリッジが混むとなれば、なぜわざわざみんな車で出かけてくるのかと（笑）。これは、混んでいるぞというその情報そのものを自分で体験したいという、疑似体験の拡大生産といえますか、情報化社会の中の一つの社会現象だろうし、そういう傾向はこれからますますふえていくと思うのです。

それでは、ベイブリッジの今現在の渋滞の度合いというのをどこにいても即刻知らせるような、そういう情報化を進めるべきだというような議論もまた出てくるわけで、地方自治体が推進している情報化の根底というのは、よくよく分析してみると、それに等しいような実につまらない情報化が結構あると思うのです（笑）。

## 二——情報化社会の課題

### ハンディキャップと情報技術

寄藤 情報化とか情報化社会が一つ残してきた

面の話として、一般にいう安直な意味のマイナスイ面ではなくて、相対的な弱者の問題というのがあると思うのです。日本国内でいうと、地域的な格差の問題と、もう一つはパーソナルな情報の弱者。

今、私が一番気にしていることは、細かいことですけれども、銀行のキャッシュディスプレイが全部タッチパネルに変わったことです。あれはつるつるですから、視覚障害者が非常に困るという問題があるわけです。また、私はアメリカ製のパソコンを自宅で、日本製のパソコンを仕事場で使っていますけれども、基本的にハンディキャップを負った人たちが使うのに何をどれだけ配慮するかという部分では、残念ながらまだまだ日本の製品は遠く及ばないと感じます。

安田 コンピュータのキーボード一つとってみても、日本の場合は非常に能率主義的なのです。今のピアノ型のキーボードの配列が悪いということ、いろいろなキーボードが私たちの仲間でも研究開発されて、中には実用化されているものもあるのですが、考え方の基本ポイント、健康者にとって使いやすいということにあるのです。私はそれではまずいのではないかと思えます。それが標準品ということ、世の中に流通するのではなしに、そういうものもあってもい

い、だけど、そうでないものも自由に使える、そういうマーケットをつくらなければいけないと思っています。

アメリカには、一九八七年以来、連邦政府機関では、両手打ちでしか使えないようなキーボードは一切だめという法律があります。少し専門的になるのですけれど、今私たちが使っているキーボードは、大文字を打つときにシフトレバーを押して、それで所定の文字をたたくという、一度に二本の指を使わなければならないキーボードです。これは、コンピュータキーボードも含めてたくさんあります。それを連邦政府は今後一切使わないと決めたのです。

これはキーボードの能率を尊重する立場の人からいうと、非常に不満な決定なのです。特にブラインドタッチと呼ばれているプロのタイプライターの打ち方ができないわけです。そういうものを追放してしまうのかという議論がアメリカ国内でも一時あったのです。けれど、基本的なもの、考え方は、障害をもった人も平等に働けるようにということです。つまり、場合によっては一本指で打てる、雨垂れ式に打てる、口にくわえた鉛筆でもキーボードが打てる。そういうキーボードを役所で使う標準のキーボードとして決めておかないと、障害をもつ人たちが気持ちよく働けない。そういう思いやりとい

うのがあるのです。

遅まきながら、私たちも今それを考え始めまして、JIS規格の中に、障害をもつ人たちのためにどういうキーボードがいいのか、それと健常者との整合をどうとるかというのを研究課題として取り上げて、今いろいろやっている最中なのです。

それと同じで、銀行などの場合も、少し思いやりが足りなかったといえると思うのです。技術者というのは、自分の能力を基準にして、その中で一番性能のいいものをつくり出そう、クリエートしようという、非常に悲しいさがありまして、どうも周辺の全般的な情勢の中で、妥当な範囲での我慢といえますか、落ちつきをついつい忘れてしまう。これは私たちの方で反省しなければならぬ問題ではあるのですが、情報機器にはそういう問題があると思うのです。

一方、金融機関では、ファームバンキングシステムが大成功して、それを今度家庭までおろすホームバンキングシステムに力を入れ始めています。ここでも、ホームバンキングシステムを、省力化・高付加価値化という観点だけでとらえずに、できるだけそういう健常者中心のシステムから疎外されている人たちへの救済策という、そういう考え方に発想を転換して推進してもらいたいと思うのです。ホームバンキング

システムが普及すれば、身障者の人に使いやすい入力装置、出力装置というのも考えられるし、混んだ街に出かけていってどうのこうのするよりは、自宅で片づけられるものができるだけ自宅で片づけるという、そういうことが可能になると思うのです。

もう一つ、情報化で一番大事なことはテレコム・ミューティング。日本では在宅勤務といっていますけれども、私たち血気盛んな連中が通勤電車が嫌だということだけでテレコム・ミューティングをやるとするのは、これはけしからんと思うのです。満員のJRに揺られてでも、社会の一つのグループの中に参画していくというのは、健常者の働く義務の一つだと思うのです。だけど、体力的に弱い人たちとか、あるいは家庭の主婦、そういった人たちが能力のある人は、テレコム・ミューティングというものを、積極的に使ってもらいたい。そういう人たちが積極的に使えるための機器開発とかシステム開発、そういうものをやっていかねばいけないと私は思っています。

それと、私自身のプライベートになりますが、大学もあと五年足らずで定年です。定年の後をどうするかということを考えたとき、どうも中央で一生懸命活躍するのはしんどい(笑)。結局、死ぬまで身も心もぼろぼろにぞうきんのよ

うに使ってしまったって、本当に充実した生活というのを送れずすんでしまうのではないかと、不安感もなきにしもあらずなのです。それでは元気なうちに何をやりたいかという、地方自治体というか、自分たちのいる地域の共同体の中で、私自身が持っている高度情報化技術というものを生かせる道があったら、そちらの方がはるかにいいという思いがあるのです。

私ぐらいの年代だとか、私程度の能力を持っている人は、皆さん、そういう思いがあると思うのです。それを阻害している家庭的な要因だとか、経済的な要因だとか、いろいろなしがらみがあって、なかなか皆さん飛べないでいる。そういうものを積極的に引つ張り出せるような情報化システム、これは何も行政だけではなくて、民活でもいい、あるいは第三セクターでもいい、そういうシステムというのがこれからでき上がっていかないと難しいという感じがします。

寄藤 散発的にはパソコン通信の大規模ネットワークの中で動きがあります。私も入っていますけれども、意外に、対話していて仲よくなると、身障者だったというケースが多いのです。だから、彼らにとっても大事なメディアなのだと感じます。

それと、まさに今いわれたようなことが電子



メールで流れているケースがあります。「もう疲れたから家にいたい。ただ、ロシア語の翻訳ができるから、注文があったらどうぞ」というメールを発信している人がいるとか。名前を見ると、どこかで見たことがあって、実は大変な大物だったりするのですが(笑)。

### 情報の地域間格差

寄藤 それともう一つの、情報の地域間格差については、東京、横浜にいとあまり話題にならないのですけれど、地方にいくと猛烈な勢いで出てきます。私からみますと、多少幻想の部分もあると思うのですが、そういう格差があるから、例えば地元の企業が成長できないとか、あるいは成長産業である情報産業が来てくれなるとか、全部そこへいってしまうようです。

安田 それはあります。日本におけるニューメディアの中で、ほとんど大失敗だといわれているものにCATVがあります。ところが、CATVの中で、初期のころ、かなり成功した部分もあったのです。それはすべて区域外再送信というものなのです。

それは関東平野一円に住んでいれば何でもないことなのですけれど、関東平野を取り巻く箱根山塊から秩父山塊、さらには榛名山塊、赤城山塊、そういう山並みを越えた向こうの人たち

にとつては、これは深刻な問題でした。関東平野ではキー局七局のテレビ番組がたくさん見れる。ところが、田中角栄氏が郵政大臣になるまでは、日本の電波行政の根本方針というのは、その山を一つ越えたところではNHK総合テレビとNHK教育テレビ、プラス民放一局というのが基本だったので。だから、山の向こうに住む人たちは、峠道の一つ越えれば向こうは七局もテレビを楽しんでいるのに、何でおれのところは三局だけで、それも一つは教育テレビなのだ。とにかく、文化的差別というか、文化果つるところという、そういう錯覚を持っている人が随分いたわけです。

笑い話だったのは、山を越え、あるいは山の谷間を反射しながらやってくる東京の電波をとらえると、これは区域外再送信のCATV業者にとつてはまさに金鉱を掘り当てたのと同じになる、そういう時期があったわけです。

長野県のある人が、日本テレビの電波の明瞭に映るポイントを発見した。これはもう温泉を発見したのと同じで、そこにアンテナを立てれば有線テレビで大もうけできるといって、喜んでいたので。ところが、雪が降ると、全然見えなくなった。私のところへやってきました、「先生、テレビの電波というのは雪で吸収されてしまうのですか」と(笑)。よくよく聞いて

みたら、日本テレビだということです。その年の秋に日本テレビは、今まで自分の社屋からテレビ電波を発射していたのを、東京タワーに移したのです。だから、発射するポイントが変われば当然金鉱はどこかに雲散霧消してしまうわけです。

だけど、そういう時期にもうけた人がいたものですから、その後のいわゆる有線テレビの幻影を生み出した根本原因にもなったわけです。今でも、地方の有線テレビの経営の基礎になっているのは、区域外再送信だということがいえるわけです。

ただ、いろいろな考え方があっていいです。何も東京の集中文化を取り入れることはない。地方には地方の生き方があるから、地方のやり方でやればいいのではないかともいえると思うのです。

私は、ある程度の文化格差だとか情報格差というものは、発生しても仕方がないという考え方を持っています。むしろそれよりも、全般的に情報格差があっても、この分野だけは東京よりも、あるいは世界を凌駕するというような、特化した領域を地方ごとに持つことが大事なのではないか。そういう特化した領域を持っている地方は、これからの時代、活性化していけるだろうし、そうでないところはやはりだめなので

す。

それは他人ごとではなくて、横浜だってそうだと思います。いまだに、多摩川を一步越えれば道路が実に悪いといっている東京人がいっぱいいます(笑)。私は横浜人ですから、それをいわれると頭にきて、どっちが悪いのだということ、一つ一つ穴ぼこの数から比較してやり合わざるを得ないということがあります。情報格差というのはまさにそういう、多摩川を境にしてどうのこうのというのと同じくらいのナンセンスさがあると思うのですが、これはどうしようもない、持って生まれた人間のさかだと思えます。

**寄藤** そういう議論が一番華やかだったころ、まさに「情報格差」に関する調査をしたことがあるのです。最後に帰着した点というのは、供給格差みたいなものは、ある程度メディア技術とかお金をつき込むことで解決する。問題は、生産格差みたいなもので、そこにどういう人たちがいるかによって決定されてしまう。まさに今、先生がいわれたように、何か特別な創造力とかクリエイティブなものがないと、結局、もらってくるだけになってしまふ、ということでした。

ところで、さすがに最近はいわなくなりませんが、一時期は、いわば情報化によって通信は

交通を代替し得るかという議論があり、例えば私は地理学が専門なのですが、地理学とか社会学、経済学のフィールドの人間からいうと、そんなことは絶対あり得ないですね。

**安田** むしろ情報交流の活発化は、物的交流、人的交流の活発化をものすごく促進するのです。**寄藤** 一番おもしろかったのは、横浜市がデモ的にテレビ会議をやったことがあります。大手町のスタジオと横浜の会議場の間でやって、そのときの会議の幕切れのときに、はっきりとは言わないけれど「それじゃあ、今度会ったときに詳しい話しを……」というような雰囲気が終わったのですね。やっぱりそうだろうなああと。

#### 残された課題

**安田** もう一度、最初に私が提言した議論に戻るのですが、どちらかといえば今まで情報化の議論が、きょう議論したような生産技術と生活技術の面に分けて議論されていなかった。これは非常に大事なことです。

もう一つ、私が非常に心配しているのは、その情報技術、情報社会を支える基盤は、高付加価値を生み出す生産力なのです。これは、日本の場合は心配ないといわれています。ところが、その後に出てくる管理技術、管理情報、それからそれを支える人間の非常に素朴なパワーとい

うのは、何となく衰え始めてきている。それがもし顕在化してくると、情報化社会というのはもう雲散霧消、画餅に帰するという、そういう恐ろしい状況があるのです。

これは、我々が今直面している都市の問題というのも、それに似たようなケースがあつて、よく評論家の長谷川慶太郎さんがいわれているのですが、アメリカはだめだと、なぜアメリカはだめなのかというと、道路が穴ぼこだらけだと。私も本当にそう思いますね。メンテナスを全然やってない。道路は国力とか社会経済力を支える象徴であつて、その豊かな生産力の上に情報化社会というのは花が開いているのですが、日本も何となく最近そんな思いがし始めたのです。

それは具体的には、家内がスーパーマーケットで買ってきたわずか七十円の白熱電球ですが、ソケットに入らないのです(笑)。家内が見てくれというので、無理やりねじ込もうとしても入らない。おかしいなと思つてよく見たら、口金に変形しているのです。しかも、どこかで押しつぶされて変形されたものではなしに、明らかに製造工程での変形で、それがいろいろな品質管理から何から全部すり抜けてマーケットに出てきているのです。

また、最近いろいろ経験している例では、国

産自動車というのは技術的に頂点までできてしまっ  
て、もういうことはない。ところが、アフター  
ケアの技術力というのは非常に落ちてきている。  
それはもう実感として感じます。それから、今  
たいへん重要な問題にビルの特高受電装置があ  
ります。これは自動車もそうなのですが、こう  
いうものの技術者というのはみんな高齢化して  
しまい、唯一残っている職人かたぎの人たちが  
リタイアすると、もう恐るべき事態になる。

そういう機械そのものの安全メンテナンスと  
いうものが手薄になってくると、一体どうい  
う事態が起こるのか。あと十数年もすればビルの  
受電装置はみんな火を噴いて（笑）、それこそ  
インテリジェントビルどころの騒ぎではないと  
いうような笑い話もあるのです。

本当に地道に社会を支えていくという、そう

いう基礎技術を持った人たちが非常に軽んじら  
れる時代になってきたということです。これは  
恐ろしい。だから、そういう人たちをどうい  
うふうにして養成していくのか。これは私ども大  
学レベルでは少し上の方をねらい過ぎていたと、  
そういう反省もあります。非常に恐ろしい時代  
になったなあという感覚を実感的に持っている  
のです。

寄藤 そういう部分の一部については、アジ  
アの労働者が入ってきていて、現場の人たちか  
らすれば、もう彼らでなければ技術を引き継い  
でくれないという主張があります。すごくかわ  
いがあって、技術を身につけてくれたけれども、  
実は存在自体が不法なのだというようなパラドッ  
クスがあるようです。

安田 それと、そういう人たちがいつまでも日

本の国に住みついて、常にそういう作業に従事  
してくれるのかということになると、これはか  
つて西ドイツが経験した非常に困った問題なの  
です。都合のいいときだけ国の基盤的な部分を  
担ってもらい、御用済みになればどうするか。  
また、その人たちをずっとそういう階層で格付  
けしていいのかどうか、という問題が起こって  
くるのです。だから、基礎的な問題を、自分たち  
の国でどう解決するのかという、基本的なポリ  
シーを打ち立てた上で、場合によってはお手伝  
いしてもらおう。安易に肩がわりという考え方は  
非常に危険だと私は思っています。

寄藤 そうですね。

△安田 東京電機大学工学部教授、

寄藤 ㈱エポックリサーチ調査研究部長▽